

附足輕となり、園に住し、柔術を學びて之を能くし、道場を開いて子弟を教養した。性酒を嗜み、曾て金澤に赴いた時、野町に於いて茶店に憩ひ、芳醇三升を盡くして、肴は僅かに鯨一本を食うたのみであつた。安政五年八月十七日六十四歳を以て歿した。

カネコマンエモン 金子萬右衛門 もと朝鮮の人。征韓の役に毛利輝元の軍に伴はれて來り、前田利長の時召出され、御歩組となり、切米二十六俵を賜はり、殺生御用を勤めた。後に大坂陣に従ひ、慶安五年病死。その子萬右衛門相續して御鷹匠組となり、亦殺生御用を勤めたが、後には小川七郎左衛門の弟子となつて火矢を習ひ、元祿十一年病死した。その子吉右衛門は村井出雲親長の小姓組を勤めた。

カネサダ 兼定 加賀の刀工。加州住兼定と切る。文久頃。木下兼重の門人であらう。

カネシゲ 兼重 加賀の刀工。加陽金府住藤原兼重又は加州金澤住木下伊勢大藤原兼重と切る。甚太郎兼久の子。通稱木下甚之丞。文化十三年に生まれ、安政六年九月三十日伊勢大塚に任じ、文久二年六月五日歿、享年四十七。

カネダイチゴロウ 金田市五郎 加賀藩の手木足輕。弟大右衛門と共に大力を以て聞えてゐた。正徳四年二人江戸深川八幡に参詣し、社前の大石を擧げて人目を駭かしたことがあるといふ。

カネツケイハヒ 鐵髮涅祝 藩政時代では、女子の婚約が定まつた時鐵髮で齒を涅め、宴を張つた。或は子を産むに及んで初めて涅齒するものもあつた。能登の農家では男子の烏帽子親を撰定する如く、相當の年齢に達した女子は、御齒黒親を定めて祝ふ風習のある所もあつたが、オハグロオヤ 御齒黒親。

カネトマチ 金戸町 金澤の舊町名。野町四町目の下を呼んだのであるが、町名の由来は詳かでない。

カネトモ 兼友 加賀の刀工。加州住兼友と切る。寛永頃。

カネトヨ 兼豊 加賀の刀工。通稱木下甚吉。甚之丞兼重の弟でその後を襲いだ。加州住藤原兼重又は木下伊勢大塚藤原兼重と切る。天保二年生まれ、慶應二年三月十五日伊勢大塚を受領し、明治四十年七月十日歿、享年七十七。

カネナガ 包永 加賀の刀工。加州住包永と切る。慶長頃。

カネナガ 兼永 加賀の刀工。加州住兼永と切る。新刀であるが、時代不詳。

カネノブ 兼延 加賀の刀工。加州藤右衛門尉兼延と切る。天正頃。

カネノブ 兼信 加賀の刀工。天保より文久頃に及ぶ作を見、その作風木下甚太郎兼久に似る。加州住兼信と切り、又加州住兼若五代藤原兼信天保八年月日と切つたものもある。その兼若五代とするものは、兼若累代の中何人か、五代の外孫に當るを意味するものであらう。嘗て兼久の子兼重の弟木下孝次郎を之に當てた説もあつたが、それは誤であり、木下氏であるか否かは明らかでない。

カネノリ 兼則 加賀の刀工。系圖に初代は炭宮秀勝の二男で、通稱兵右衛門。その子に助次兼則があり、その子に作兵衛兼則があり、その子の作之丞兼則は金澤觀音下に住したとあるが信じ難い。今作品によつて考察するに、加州炭宮兵右衛門兼則と切つたのは天正頃と見え、加州住藤原兼則と切つたのは寛永頃で作兵衛であらう。次に加州金澤住炭宮兼則元祿十三年二月十一日、又は加州金澤觀音下住炭宮兼則と切つたのは作之丞である。

カネノリ 兼則 能登の刀工。能州七尾住人兼則元龜三年二月日など、切る。

カネノリ 兼法 加賀の刀工。加州住炭宮兼法寛永十五年二月二日又は加州金澤住藤原兼法と切る。

カネノリ 規矩 加賀の刀工。裏に規矩、貞享甲子大腋毛松波時右衛門同乙丑三重剛大澤新助試之、表に賀陽侍臣郁文章平應輝工夫燕飛虎亂飛術使回國之巧治造焉と切つたものがある。元祿の炭宮兼則の隠銘であらうといはれる。

カネハル 兼春 加賀の刀工。系圖に初代竹右衛門兼春は炭宮秀勝の嫡子で、關兼春から相傳し、永正頃。二代宗兵衛兼春、三代作兵衛兼春を経て、四代八兵衛兼春に至り末退轉したとするが信するを得ぬ。今之を作品によりて考察するに、兼春と切り天正頃なのは竹右衛門であらう。賀州住炭宮兼春と切り寛永頃なるは宗兵衛であらう。又加州住藤原炭宮兼春承應三年八月、炭宮兼春以完(空)粟鐵作之など、切つたのは作兵衛又は八兵衛であらう。

カネハル 兼治 加賀の刀工。兼治と切る。炭宮氏の一族で、寛文頃。

カネヒサ 兼久 加賀の刀工。その初代は關兼元の末裔で、元龜の頃加賀に入り、爾後數代相傳へたといふが、新刀期の作品を絶えて見ぬのみならず、承應三年前田利常の瑞龍寺寄進二十二刀中にもその名を列せぬ。思ふに初は下職であつたのなるべく、その鍛冶を開きたるは新々刀期に入る。初世兼久は加賀住兼久又は兼久と切る。初代泰平の弟子で、通稱木下甚之丞、寛政三年十二月廿五日歿。二代兼久は加州住兼久又は兼久と切る。通稱木下甚三郎、二代泰平に師事し、享和三年二月十八日歿。三代兼久は加州住兼久文政七年二月日・加陽金府住木下甚太郎藤原兼久天保十五年十月日など、切る。寛政七年生まれ、又二代泰平に業を習ひ、弘化三年四月十六日歿した。

カネヒロ 包廣 加賀の刀工。通稱木下仁助。藤右衛門幸昌の甥で、その別家である。享保頃の人。此の子孫で、寶曆元年の取調書には、木下藤助包廣が居た。

カネホリヤマ 金掘山 白山の目附谷壺、瀧の北溪流の東に在る。白山遊覽圖記にいふ。永祿四年周防の人山口三之輔、尾添村勘助、瀬戸村長太夫と謀つて金礦を採掘したが、八年五月地震によつて崩壊し、長太夫以下十數人墜死したと。

カネマキ 兼巻 加賀の刀工。初代兼巻は關兼定の後葉で、天正の頃加賀に來たといはれる。號は喜齋。兼巻と切る。二代兼巻は慶長・元和の頃金澤に住し、宮村氏、通稱五郎右衛門、越中高岡に住したこともある。又兼巻と切る。その弟に藤造兼巻があつて高岡に住した。三代清藏兼巻は名工で、初め金澤に住し、裏銘のあるもの殊に多く、寛永元年頃から十六年に至るまで賀州金澤住兼巻作と切り、その後前田利常の小松隠棲に伴ひ、賀州

たとあるが信じ難い。今作品によつて考察するに、加州炭宮兵右衛門兼則と切つたのは天正頃と見え、加州住藤原兼則と切つたのは寛永頃で作兵衛であらう。次に加州金澤住炭宮兼則元祿十三年二月十一日、又は加州金澤觀音下住炭宮兼則と切つたのは作之丞である。

カネノリ 兼則 能登の刀工。能州七尾住人兼則元龜三年二月日など、切る。

カネノリ 兼法 加賀の刀工。加州住炭宮兼法寛永十五年二月二日又は加州金澤住藤原兼法と切る。

カネノリ 規矩 加賀の刀工。裏に規矩、貞享甲子大腋毛松波時右衛門同乙丑三重剛大澤新助試之、表に賀陽侍臣郁文章平應輝工夫燕飛虎亂飛術使回國之巧治造焉と切つたものがある。元祿の炭宮兼則の隠銘であらうといはれる。

カネハル 兼春 加賀の刀工。系圖に初代竹右衛門兼春は炭宮秀勝の嫡子で、關兼春から相傳し、永正頃。二代宗兵衛兼春、三代作兵衛兼春を経て、四代八兵衛兼春に至り末退轉したとするが信するを得ぬ。今之を作品によりて考察するに、兼春と切り天正頃なのは竹右衛門であらう。賀州住炭宮兼春と切り寛永頃なるは宗兵衛であらう。又加州住藤原炭宮兼春承應三年八月、炭宮兼春以完(空)粟鐵作之など、切つたのは作兵衛又は八兵衛であらう。

カネハル 兼治 加賀の刀工。兼治と切る。炭宮氏の一族で、寛文頃。

カネヒサ 兼久 加賀の刀工。その初代は關兼元の末裔で、元龜の頃加賀に入り、爾後數代相傳へたといふが、新刀期の作品を絶えて見ぬのみならず、承應三年前田利常の瑞龍寺寄進二十二刀中にもその名を列せぬ。思ふに初は下職であつたのなるべく、その鍛冶を開きたるは新々刀期に入る。初世兼久は加賀住兼久又は兼久と切る。初代泰平の弟子で、通稱木下甚之丞、寛政三年十二月廿五日歿。二代兼久は加州住兼久又は兼久と切る。通稱木下甚三郎、二代泰平に師事し、享和三年二月十八日歿。三代兼久は加州住兼久文政七年二月日・加陽金府住木下甚太郎藤原兼久天保十五年十月日など、切る。寛政七年生まれ、又二代泰平に業を習ひ、弘化三年四月十六日歿した。

カネヒロ 包廣 加賀の刀工。通稱木下仁助。藤右衛門幸昌の甥で、その別家である。享保頃の人。此の子孫で、寶曆元年の取調書には、木下藤助包廣が居た。

カネホリヤマ 金掘山 白山の目附谷壺、瀧の北溪流の東に在る。白山遊覽圖記にいふ。永祿四年周防の人山口三之輔、尾添村勘助、瀬戸村長太夫と謀つて金礦を採掘したが、八年五月地震によつて崩壊し、長太夫以下十數人墜死したと。

カネマキ 兼巻 加賀の刀工。初代兼巻は關兼定の後葉で、天正の頃加賀に來たといはれる。號は喜齋。兼巻と切る。二代兼巻は慶長・元和の頃金澤に住し、宮村氏、通稱五郎右衛門、越中高岡に住したこともある。又兼巻と切る。その弟に藤造兼巻があつて高岡に住した。三代清藏兼巻は名工で、初め金澤に住し、裏銘のあるもの殊に多く、寛永元年頃から十六年に至るまで賀州金澤住兼巻作と切り、その後前田利常の小松隠棲に伴ひ、賀州

カネ